

◎ 2021年度同門会 同門会賞受賞

滋賀医科大学 外科学講座（消化器・乳腺・小児・一般外科）

飯田 洋也（平成12年卒）



この度は、名誉ある滋賀医科大学外科学講座、同門会賞に選出いただき、誠にありがとうございます。本論文のタイトルは、”New metastasectomy criteria for peritoneal metastasis of hepatocellular carcinoma: A study of the Japanese Society of Hepato-Biliary-Pancreatic Surgery”で、日本肝胆膵外科学会の学会誌であります、Journal of Hepato-Biliary-Pancreatic Scienceに掲載されました。要約ですが、肝細胞癌の腹膜播種は、他の消化器癌の腹膜播種と異なり、膨張性発育であるため、比較的容易に摘出可能です。しかしながら、肝癌診療ガイドラインでは、肝外転移である腹膜播種に関しては、薬物療法のみが推奨されています。既報では、腹膜播種切除後の長期生存例の症例報告が散見されますが、まとまった報告はありませんでした。

日本肝胆膵外科学会では、学会が主導する「プロジェクト研究」が公募されています。学術的に意義があり、社会的な使命を果たすにふさわしい、協同で実施する調査や研究に対し、学会が研究経費を補助する制度です。本研究は、滋賀医科大学外科学講座、谷 眞至教授のご推薦もあり、平成28年度のプロジェクト研究に採択されました。その結果、全国の肝胆膵外科の修練施設より、92例の腹膜播種切除例の臨床病理学的データを集積することができ、解析の結果、腹膜播種の数と大きさで定義されているPeritoneal Cancer Index (PCI)が6点未満で、かつ遺残ない切除ができた場合、腹膜播種切除が予後に強く寄与することが明らかになりました。この結果によって、今までは薬物療法しか治療方法がなかった、肝細胞癌の腹膜播種に対し、手術療法という新たな可能性を示すことができました。

近年、レトロスペクティブな臨床系の研究は、本研究のような全国レベルの多施設共同研究でないと、インパクトファクターの高いジャーナルに受理されることが困難な傾向にあります。当講座から、今後も全国レベルの研究のPrincipal Investigatorが生まれることを切に願います。

最後になりましたが、本研究に関し、多大なご協力をいただきました、滋賀医科大学外科学講座の先生方には深く感謝申し上げます。